

BPT (バイオマスプロジェクトチーム)だより No.33

<http://www.pref.chiba.lg.jp/svozoku/e/ichihai/bio/biotop.htm>



平成19年8月8日(水)
バイオマスプロジェクトチーム
(環境生活部資源循環推進課)

1. 事業の進捗状況等

○「バイオマス立県ちば」アドバイザリー委員会の開催

7月30日、千葉市内にて、今年度第1回目の「バイオマス立県ちば」アドバイザリー委員会が開催されました。

議事では、平成19年度の事業説明や昨年度から実施している県内のバイオマス利活用施設の実態調査結果報告等を踏まえた推進方策検討調査の方法について意見交換が行われました。



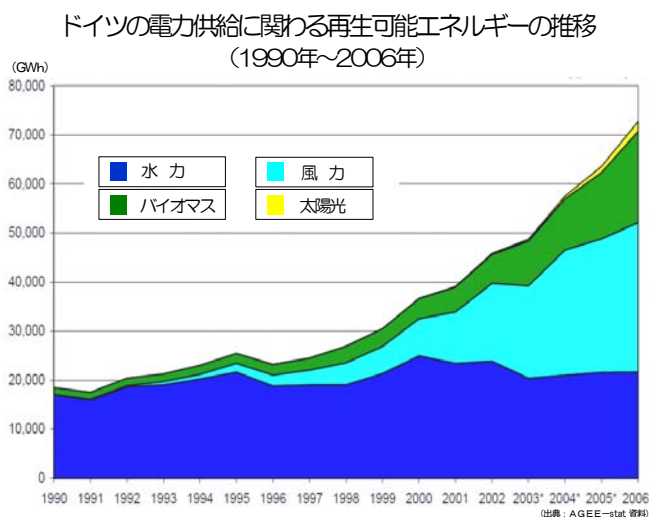
「バイオマス立県ちば」アドバイザリー委員会

○環境先進国ドイツのバイオマス最新レポート (その2) ー住宅地域に建設される木質バイオマス熱供給発電施設ー

デュッセルドルフ市が推進する再生可能エネルギー事業

デュッセルドルフ市では、3年前からバイオマスエネルギーを重視した熱供給・発電事業を進めています。その前提となっているものに「再生可能エネルギー法 (2000年施行)」があり、同法では2020年までに国内の消費電力に占めるバイオマス発電による割合を20%まで引き上げることが目標として設定されており、ドイツではバイオマスを利用する再生可能エネルギー事業が拡大しています。

デュッセルドルフ市が取り組む事業には、ガラット地区の住宅地に建設中の熱供給発電施設があります。この施設の特徴は、市内で発生する“廃木材”を燃料に利用(約4万トン/年)してコージェネ発電を行い、地域への暖房用熱供給事業と発電事業を併せて行うことです。コージェネレーションによるエネルギー供給能力は、住宅に供給する暖房用の熱供給が10MWで、電力が3.5MWになります。



住民のアイデンティティーに結びつける木質バイオマス熱供給発電施設

この施設を住宅地に誘致できた理由には、利用する廃木材は“廃棄物”ではなく“環境に優しいバイオマス燃料”といったポジティブな視点による事業説明と、住民意識を尊重した景観設計を導入したことがあげられます。これにより、住宅地に近接した施設から地域暖房用の熱供給することで、高い効率のエネルギー利用が可能となりました。また、施設の外観（景観）を“美的感覚のあるもの”にした理由は、ドイツ市民には「どのように見えるか」ということはとても重要なことで、住民にとってその施設と自分の“アイデンティティー（地域への帰属意識）”が強く結びついているからだと思います。そのため、この施設ではガラス張りの外装とグリーン色のライトアップが計画されています。

いまの日本では、住宅地域にこのような廃木材を利用する木質バイオマスエネルギー施設を設置することは困難でしょう。その理由は、廃棄物を燃料として使用する火力発電施設を“住宅の近く”に建設することに住民の理解を得ることがとても難しいからです。

ドイツ廃棄物政策には、「利用ができれば廃棄物ではなく資源である」と考える基本的な思想があり、市民、企業、行政が協力して「利用可能な廃棄物」であり「環境にやさしいエネルギー資源」でもある“バイオマス”のポジティブな利活用が進められています。廃棄物やその利用施設をネガティブなものとして考える「日本的な視点」の逆をいくことで、確実に成果を上げているドイツの廃棄物・バイオマス政策から学べることは多いでしょう。



美しくライトアップされた完成イメージ
「ガラット熱供給発電施設」

2. 普及啓発活動

○芝山ほたる夏まつり

7月28日、芝山航空科学博物館前広場で開催された「芝山ほたる夏まつり」でバイオマスプラスチック製品を展示し、取組みを紹介しました。

また、80名以上の来場者の方にアンケート調査を協力していただきました。



芝山ほたる夏まつり

○講演等について

7月は以下の講演を行いました。

- ・廃棄物対策・清掃事業研修会（7月9日・教育会館）
- ・環境行政職員研修（7月27日・職員能力開発センター）